

# 「主体的な言語生活者の育成」のためにJ-POP歌詞が持つ可能性

池田 匡史

## 1. 問題の所在

### 1. 1. 国語教育学における言語生活

国語教育学においては、学習者の「言語生活」に着目した目標設定や学習指導が展開されてきた。これまで国語科の学習指導要領では、「昭和 26 年版では西尾実に由来する「言語生活」概念が社会的・個人的・文化的な位相をすべてふくむものとして使われた。昭和 33 年版では目標に「日常生活」「言語生活」が使われ枢要な位置を獲得した」（榎井,2006,p.112）が、その後に目標からは消えることとなったとされるが、「言語生活の考えは戦後を通じて生き残ってきた」（田近,1999,p.7）ともされ、学びの成果が学校知に留まらない姿を求めるものとして捉えられてきた。たとえば、語彙や敬語、漢字など、言葉の規範的な面を日常でも活かすことが「豊かな言語生活」であるという視点を示す論考も見られる（吉永,2010）。ただ、桑原隆（1996）は「「言語生活」という概念は日常生活の実用的レベルだけで問題にされてはならないであろう。」（桑原,1996,p.47）と述べ、「主体」、「人」が関わったかたちでの捉え方を求めている。「主体的な言語生活者の育成」（桑原,1996,p.110）ということばで表される桑原の論は、「主体の言語生活のなかに、豊かな言語活動、とくに読むことや書くことが日常的に溶け込んでいる人間の育成が望まれている。」（桑原,1996,p.110）と述べる。では、その「主体的な言語生活者の育成」にはめられ、どのような行為を誘うことが求められるのであろうか。この視点において西尾実は、言語生活を捉える上で、「捨ててある自分の言語生活のありのままを、本気にふりかえって見るのが出発点である。」（西尾,1975a,p.58）と述べている。西尾のこの言は言語生活の地盤となる話しことばに関して述べられたものであるが、自分自身の話しことばのみならず、様々な場で触れることになることばに対して意識的になることを学習者に求める必要性を示唆する。たとえば竜田徹・鈴木愛理（2012）は、「いいな、と思う言葉、自分に触れてくる言葉、引っかかってくる言葉すべて」（竜田・鈴木,2012,p.129）をノートに抜き書きし、それが集まってきたときに、その言葉をきっかけに文章を書くという取り組みを提案している。ここで言う「言葉」の指しているものは、ある文学作品の一節など断片的な表現であって、作品全体ではない。これは、「いいな」と思うという学習者の主観性を重視している点において「感覚性」や「感情性」を重視したものであると言える。このような営みは授業実践レベルにおいても報告されている。堀江佐和子（2009）は、「言葉の背景を考え、自分の体験と重ねたり想像したりして読み味わう」（堀江,2009,p.17）ことなどを目標として「教科書の名言と出会う」という実践に取り組んだ。具体的な活動としては、教科書の中から学習者が名言であるとみなした言葉について、「その言葉の背景を説明する。また、自分はその言葉をどういう意味と理解しているか、その言葉の効果はどのようなものかなど、自分なりの解釈を伝える。そして、その言葉からどんな言葉を思い浮かべたか、など、自分がその言葉をどのように味わったかを伝える。」（堀江,2009,p.18）という三つの要素を、それぞれ一文ずつの合計三文で文章にまとめるというものである。このような行為を日常から行うことができ、このことを志向する学習者こそ目指す

べき言語生活者であると言える。ただし、これは国語科という教科内、教室内でのみ行う学習者としてではなく、広く日常生活で出逢うことばに対しても「いいな」と思うことに意識的になれる、またその経験を積み上げていくことができる学習者として捉える必要がある。

では、そのような言語生活の向上を追求することのできる学習者育成のために、国語科教育ではどのような行為を誘うことが求められるのであろうか。ここで注目すべきなのが、「考えること」である。西尾実(1975b)は、「言語生活の向上は学習者ひとりびとりの「考えること」を主軸と」(西尾,1975b,p.177)するという意識を持たねばならないという。ここで言う「考えること」について西尾は、「「考えること」は、いうまでもなく、「感じること」をも、「知ること」をもふくんだ「考えること」である。」(西尾,1975b,p.14)と説明している。この「考えること」を重視する国語教育実践に主題単元学習がある。この主題単元学習において、ことばに関わる部分に、より直接的に着目した論考として石津正賢(1996)が挙げられる。石津は、「時間は、伸び縮みする!」という主題単元学習を実践した。これは、「一見「むだ」と思われる中に自分の時間を見つけ、生活を「ゆたか」なものにしていくことを単元の中で考えたい。」との思いのもと、「各自の「時間」についての主題意識の醸成を目指す。」として取り上げたものである(石津,1996,p.26)。石津はこの主題単元学習後の長期休業期間中の課題として「本単元で、学んだこと、考えさせられたことに関するものを身の回りの書籍、歌詞、TV、会話等から探し出し、「併せて、その表現に対する自己の思い」(石津,1996,p.27)を記すという取り組みを行った。そこで学習者は、単元で喚起させられた主題意識との関連性を、当時話題となっていた楽曲、GEISHA GIRLSの「少年」<sup>1</sup>という曲の歌詞の中に求めた。特に「17のままならいいのね いつまでもみんな…」という部分に反応し、時間の経過はどんなときも逃れられないものだが、それを後悔として捉えることはしたくないという思いが生まれている。主題単元学習でスタートした「考える」という営みの中で、この歌詞との関連づけが行われたものと捉えられる。この表現の内容について石津は「単元で学んだことを自身の言語生活の中から探し、生き方に取り入れていこうという姿勢が見られる。」(石津,1996,p.29)と評価し、このような姿勢を「ことばを通して生き抜く力」であると表現している。ここで示された学習者の姿で、学習の課題としてではなく、習慣化した姿は、「主体的な言語生活者」であり、目指すべき姿であるように考えられる。この事例で特に注目したいのが、J-POP<sup>2</sup>の歌詞というソースの重要性である。

## 1. 2. J-POP歌詞と学習者の言語生活

これまで国語科教育の歴史を鑑みると、中島みゆきや松任谷由実の楽曲の歌詞が教科書教材として掲載されてきた<sup>3</sup>。また、主に単元学習論において、教科書教材以外のことばを教材、学習材と

---

1 GEISHA GIRLS「少年」作詞：売野雅勇,作曲・編曲：坂本龍一,1995年

2 鳥賀陽弘道(2005)は、「J ポップとは、かつて歌謡曲、ロック、フォークなどと呼ばれたジャンルをすべて解体してシャッフルし、再構成した名称なのである。」と定義し、1988年末から89年初めに生まれ、94年から95年頃定着したとする(鳥賀陽,2005,p.21)。つまりJ-POPは、1990年代以降の音楽の総称のことを指すと認識されている。

3 二者の掲載状況は以下の通りである。中島みゆき「永久欠番」(東京書籍『新しい国語』2002年、東京書籍『新編 新しい国語』2006年)「誕生」(角川書店『高校生の現代文』1999年、教育出版『伝え合う言葉 中学国語1』2006年)「傾斜」(角川書店『高等学校現代文』1995年)、松任谷由実「春よ、来い」(光村図書『国語2』2002年)

する向きが存在してきた。「単元学習は学習者の言語生活力を高めることをめざすので、その教材は、学習者の言語生活にかかわるコミュニケーション・メディアのすべてを教材にできるし、しなければならぬ。」(浜本,1992,p.77)と述べられるように、大村はまをはじめ、多くの実践者によって、教科書の外から教材が開発されてきた。このことを踏まえ、当然歌詞のようなテキストも教材、学習材の対象になり得る。町田守弘(2005)は、アンケート調査によって、高校生は共感できる歌詞によって好きになったアーティストや曲を持ち、さらに国語科の教材として扱うことに比較的肯定的な立場を示していることを明らかにした(町田,2005,p.8)。この調査では、歌詞を授業で「扱ってほしい」と答えた学習者が46.3%「扱ってほしくない」と答えた学習者が14.7%「どちらでもない」と答えた学習者が39.0%という値を示している。学習者の言語生活の実態と、学習者の要求からは、歌詞を授業に持ち込むことの有効性を認めることができる。ただこの値について町田は、「歌詞に対する嗜好はあくまでも個人的なものであって、授業という公的な場所で扱うということに対する疑問や反感を持つ生徒もいる。」(町田,2005,pp.8-9)と分析している。この分析に述べられている学習者の疑問や反感は、授業で歌詞をどのように扱うのかや、どのような文脈で扱うのかという問題が大きく関係していると考えられる。どのような文脈で、どのように扱われれば、どのような成果が期待できるのか、という問いへの答えが明確でないことが「どちらでもない」と答えた学習者の多さにも繋がっていると考えられる。そしてそれはまた、実践者側にとっても積極的にそれを取り上げる意義が明確になっていない点が挙げられる<sup>4</sup>。つまり、J-POPの歌詞を扱った実践の整理や、積極的に取り上げることの意義を検討されてこなかったのである。よって、本稿では、J-POPの歌詞を国語科学習に組み込むことの持つ意義や条件を検討することを目的とする。

## 2. 研究の方法

まず、国語科における実践として、これまでにどのような実践が展開されてきたのかを分類していく。

また、J-POPそのものは楽曲であるため、音楽科教育の場でも歌詞を教育の場に持ち込むことが検討されている。そこで国語科の教科内容としての面を考えるために、音楽科教育における論考を取り上げ、J-POPを学習の場に持ち込むことに対してどのように受けとめられているのかを検討する。このことは、国語科の教科内容の独自性を明らかにするだけでなく、参考にすべき点も明らかにすることに繋がる。これらを踏まえ、国語科教育にJ-POPを持ち込むことの意義や条件を探ることとする。

## 3. これまでの国語科教育におけるJ-POP歌詞の扱い

丹藤博文(2010)は、「フォークソング・ニューミュージック」と呼ばれる歌謡曲のバリエーションが1970年代以降に登場したことを述べた上で、「このころから、若者たちは萩原朔太郎や中野中也にではなく、無数の「シンガーソングライター」の送り出す歌詞に、自らの感性を解放するようになった。」(丹藤,2010,p.174)と述べる。そしてそれは1980年代から90年代にかけての大量消費社会の出現により増長し、現代においても同様であると言う。

---

4 町田(2009)では、実践者側へのアンケート調査の結果が記されている。ここでは、歌詞を教材として扱ったことがあるという実践者が半数以上いたものの、「その場の盛り上がり」「意欲的に取り組んではいたが、言語に対する興味は深められたか疑問」とする声があった。」(町田,2009,p.29)

「詩情（ポエジー）を生徒に手渡すための努力やくふう」をしなくても、中高生たちはだれに頼まれることもなく、CD をレンタルしてきては、あるいはパソコンやケイタイからダウンロードしては、お気に入りの曲に感情移入し彼らなりの「詩情（ポエジー）」を感じているのである。（丹藤,2010,p.175）

たしかに、先に示した竜田・鈴木が提案する「抜き書きノート」を稿者も実践しているが、そこには「シンガーソングライター」による歌詞が多く含まれている。たとえば、大森靖子の「きゆるきゆる」<sup>5</sup> という歌の中にある「ググってでてくるとこならどこへだっていけるよね！」という歌詞がある。これを稿者は、遠く離れる友人とでも、会おうとする心があれば会えるから大げさなことではないという文脈を作った。これは、同じノートにも記していた、『伊勢物語』第 46 段の「目離るともおもほえなくに忘らるる時しなければおもかげにたつ」という歌との関連づけによるものでもある。その内容を表す表現に対して「いいな」と強く感じたのである。丹藤はここで示した稿者の例のようなことを「自らの感性」の解放、「詩情（ポエジー）」を感じる行為としていると解釈できる。そしてこのようにノートに書きためるようなことはしていなくても、学習者の言語生活の中に歌詞があるのは当然のこととして国語科教育を考えなければならないということであろう。ただ、一方でそのような認識に立っていなかったとの文言も認められる。たとえば倉澤栄吉（1992）は以下のように述べている。

「言語としての歌詞」については関心が少しばかり一いや大いに一薄いのではあるまいか。

今日豊かな日本は「歌曲の時代」を迎えておる。どこへ行っても歌は花盛りである。カラオケボックスは一体全国に何万軒あるだろうか。しかし、何となくメロディーの中で遊んでいるに過ぎない。そういう「消費的な文化」の現状を我々は黙って見ているわけにはいかない—こういう発想も出てくるのである。（倉澤,1992,p.57）

これは、J-POP というジャンルが広がろうとしている最中の 1992 年の文言であるが、こうした「消費的な文化」を利用してことばの力を伸ばすべきであるし、それに触れなければならないということでもある。こうした視点から、「歌詞は子どもたちの「いま、ここ」に関わる重要な国語科の教材となる。」（町田,2004,p.106）という主張がなされるのである。

では、これまでの国語科教育実践において、J-POP 歌詞はどのように取り上げられてきたのだろうか。

まず、言語生活面へのアプローチとなり得る実践が認められる。佐久間義雄（2013）は、中学校三年生に対しての実践において、「自分を励ましてくれる「十五歳の名言」を探して、同級生に紹介する説得力のある文章を書く」（佐久間,2013,p.64）という活動を設定した。ここで学習者が「十五歳の名言」を探す対象に歌詞の中にあることばも据えられた。

また、町田守弘（1992）は、「ワードハンティング」という年間を通した単元を紹介している。これは、「身近な場所から、一週間に一語以上、「よく意味の分からないことば」「調べてみたいことば」「新しく出会ったことば」などを発掘（ハント）」し、「ハントしたことをまず、「見出し語」

---

5 大森靖子「きゆるきゆる」作詞作曲：大森靖子,2014年

として一語につき一枚のカードに書く。カードには続けて、辞書で調査したことばの意味、そのことばの用法・用例、採取年月日、出典（できるだけ詳しく）を必ず明記する」（町田,1992,p.235）という実践である。この取り組みで、学習者が行ったハントからは、歌詞のことばが認められたことを報告している<sup>6</sup>。これらはどちらも学習者個々の言語生活から探すという行為は共通しているが、佐久間の実践は感性的、審美的な側面にアプローチしているものと言え、町田の実践は語彙指導という側面にアプローチしているものと言える点で差異が見られる。

一方で、特定の歌詞を学級全体で扱う教材として挙げた実践も認められる。

友岡晃嗣（2006）は、「大げさに言うと、意味の難解な古典的な俳句や短歌、さらには近代詩を鑑賞するよりも、よりストレートに尚且つ強烈に生徒に伝わるのではないだろうかという想い」（友岡,2006,p.21）から、中島みゆきの「雪」と「まつりばやし」を教材とした実践を報告している。これは、クラスを二つのグループに分け、それぞれに一作品ずつ配布し、読み取ったテーマやキーワードを発表させる。相手グループは、発表を聞きながら作品の世界を想像する。その後、相手側の作品を配布するとともに、曲を聴かせ、文字情報のみで想像した世界と比較をさせるという展開で行われた実践である。

町田守弘（1993）は、歌詞を教材とした三つのパターンの実践を提案、報告している。一つ目は、中島みゆき「横恋慕」、「悪女」の二作品を扱い、それぞれの歌詞において女性がどのような人物として描かれているのかを考えた後、歌をテープで聴き、イメージの変化を表明するという実践で、「歌によって「ことばの隠している意味と感情」を「新しくよみがえらせ」ることを目標と」（町田,1993,p.91）したものである。二つ目は、中島みゆき「黄砂に吹かれて」について、同一曲を歌った工藤静香の歌との表現の相違を検討するというものである。三つ目は、尾崎豊の歌詞を対象とし、「尾崎豊の表現」というテーマのシンポジウムを開くというものである。

これら二つの論考で示されているものは歌詞を教材として鑑賞、分析するものと括ることができる。このように、言語生活面にアプローチする実践と鑑賞、分析の対象とするアプローチが見られるわけであるが、前者のものには、学習者の嗜好が入り込む余地が多分にある点で評価できる。一方の后者には、ことばを十分に「考える」ことのできる場が用意されている点で評価ができる。これら両者の長所を合わせることはできないだろうか。そこで、国語科と同じく J-POP を教材とし得るであろう音楽科教育の場での論考を確認したい。この町田（1993）の提案する実践の二つ目のものは、歌詞だけではなく、楽曲という領域に踏み込んでいるものであり、音楽科教育との差異なども検討しなければならないだろう。国語科としての独自性や参考にし得る点を検討する手がかりとしたい。

#### 4. 音楽科教育におけるJ-POP歌詞の扱い

では、音楽科教育において J-POP の歌詞はどのような位置づけとされているのだろうか。ここでは音楽科教育での論考で論じられている内容との比較を通して、国語科の教育内容について検討する。尾崎祐司ら（2012）は、平成 21 年度版高等学校学習指導要領の「内容の取扱い」において、「音や音楽と生活や社会とのかかわりを考えさせ、音環境への関心をたかめるよう配慮する」ことが新しく求められたことを指摘し、その文言がポピュラー音楽と関わっているとした。また、「曲

---

<sup>6</sup> 町田は他の論考で「ワードハンティング」実践を論じる際に、例として高橋みなみ「Jane Doe」（作詞：秋元康,作曲：早川暁雄,2013年）の歌詞を挙げている（町田,2014）。

想を歌詞の内容や楽曲の背景とかかわらせて感じ取り、イメージをもって歌う」という「内容」との関わりで扱われることが多いようである。

ではまず、教材として J-POP が扱われることはどの程度あるのだろうかについて検討したい。安部有希・伊東英（2008）は、中学校、高等学校の教科書調査を行い、中学校では「青春や若い世代を題材としている」ことなどを、高校では「恋愛に関するテキストが多いこと」などを指摘した。また、ポピュラー音楽の歌詞が「鑑賞」の教材として位置づけられているものがないことを指摘し、「今の音楽教育のポピュラー音楽は、ポピュラー音楽としての音楽ではなく、むしろ合唱曲としての音楽になっていると言っても過言ではない。」（安部・伊藤,2008,p.62）と指摘している。一方で、「歌唱」だけでなく、「鑑賞」においてもポピュラー音楽を教材として用い、本研究で試みたような歌詞分析を行うのもひとつの手かもしれない。」（安部・伊藤,2008,p.63）と述べている。

尾崎祐司（2013）も、教科書掲載曲の歌詞の分析を行い、「人生」や「恋愛」をテーマとしており、「その内容は現状への満足を促すものではなく将来への希望を抱かせるもの、お互いを助け合ったり励まし合ったりするもの」であり、「これらの歌詞が著す情景や心情等を生徒に感受させることを通じて、人間の生き方などを指導することが「教育内容」となっている」（尾崎,2013,p.363）ことを明らかにした。これは、安部・伊東の指摘する内容と共通するものである。これらの論考からは、音楽科教育では教材として J-POP を積極的に取り込んでいることがわかる。

では、具体的な学習活動としてはどのようなものがあるのだろうか。木下和彦（2014）は、雑誌『教育音楽』中学・高校版の記事分析によって、過去 25 年間の J-POP を扱った展開を検討した。その結果、最も多いのは歌唱活動であり、次に器楽活動が続くという結果から、表現活動が展開されることが多いことを明らかにした。また、論考の数から、「中学・高校の音楽科において J-POP はもはや新規性をもつ教材ではなく、他の音楽様式の教材と同様に、普遍的に用いることのできる「教材」として定着した」（木下,2014,p.110）と結論づけている。その一方で木下は、調査の結果の考察において歌詞の鑑賞活動について言及してはいない。つまり、歌詞の鑑賞活動はそれほど重視されていないと解釈することができる。ただ、吉村治広（2005）が、若者の音楽嗜好を決定づける理由に、歌詞に関する面が薄いことを問題とし<sup>7</sup>、「歌詞のメッセージ性に着目しそれに対する洞察力を高める学習が、歌詞の意味内容の解釈や音楽表現の受容という行為に止まらず、メッセージ一般に対するより主体的な受容態度を育成し得る」（吉村,2005,p.158）と主張したように、歌詞の鑑賞活動の意義を述べるものも確かに見られる。

また、国語科教育で行われてきた展開と似た議論も見ることができる。それは、以下に示す井手口彰典（2007）の文言である。

多くのアーティストによってカバーされている楽曲を比較鑑賞するなどの取り組みを通じて、それぞれの表現に個別の音楽的な美しさがあることを学習させ、特定のサウンドだけを絶対視しない姿勢を事前に育むような戦略も考えうる。（井手口,2007,p.114）

これは、先に示した町田（1993）の実践にも、中島みゆきと工藤静香の比較という例で見られたものである。井手口の実践と比べて、町田の実践の意図は歌手の表現という面に着目させようとし

---

7 この前提は、先に取り上げた町田（2005）と異なるものであるが、町田が選択式であったのに対し、自由記述形式であったことが要因であろう。

ている。どのようにことばで表現するかという面はたしかに国語科の領域と言えるだろう。

このように音楽科教育では様々な検討がなされている。その一方で、J-POP を学習指導の場に持ち込むことへの問題について言及している論考も見られる。たとえば、水戸博道（2007）は以下のように述べている。

J-POP は基本的にインフォーマルな文脈で学習されているもの（楽しまれているもの）であり、J-POP をめぐる日常生活の音楽活動の“所有権”は若者たちにある。教師も含めて他人の介入や統制は難しい。（水戸,2007,pp.122-123）

これは歌詞の嗜好に個人で差異が見られるという問題とともにもう一つの問題を孕んでいるという指摘であり、それは、国語科教育にも通ずる問題点である。ある J-POP の歌詞を教材として扱うことは、学習者も解釈に自信がある。教師の解釈が持つ力が弱くなり、「指導」として成り立たなくなるとする視点を提供する論である。その一方で、逆に教師の持つ読みが権威的になるという国語科教育で長らく課題としてあげられてきた問題の解決にもなりうる指摘でもある。

以上、音楽科教育の論考から見える国語科の独自性は、教科外の言語生活面にも学習の対象を向けること、また曲を扱うときは歌手の表現に焦点を当てることなどが挙げられる。また、参考にし得る点としては、学習者の嗜好について検討しなければならないということと、教師主導の「指導」の形態を採ることの不可能性が挙げられる。

## 5. J-POP歌詞を国語科教育に持ち込む意義や条件

ここまでの検討によって導き出される、J-POP の歌詞を国語科教育の場に持ち込むことについての意義やその条件について検討したい。

まず一つには、意義として学習者の言語生活面へのアプローチという面がある。学習者が歌詞に触れる機会自体は多いにも関わらず、歌詞によって好きなアーティストを決定している学習者が多くないという現実、国語科教育を考える者としては望ましくないものである。さまざまな場で出逢うことばに意識的になる学習者すなわち「主体的な言語生活者」を育成するために、J-POP の歌詞への向き合い方に対する視点を与えることがまず重視されるべきであろう。

二つには、ことばに意識的になるということの内実を明確にしておくことを挙げたい。ことばに意識的になるということは、ことばに対して「いいな」と思う経験を分析することでもあるだろう。「いいな」と思う理由としては、韻や、リズム感の良さなどさまざまな要素が考えられる。ただ、J-POP というテキストの持つ性質を考えると、個人的な経験との結びつけを重視したい。なぜならば J-POP が共感を生みやすい性質を持っていると考えられるからである<sup>8</sup>。共感を生むということは、自分の人生経験やこれまでの読書経験などの内容が大きく関わっている。内容面での関連づけという行為は、ある物事についてどのように表されてきたかという言語文化について「考える」ことでもある。さらに「言語生活という概念は、狭義の意味での言語生活、すなわち言語文

---

<sup>8</sup> 大谷義昭は、子どもにとっての J-POP の魅力として、「歌と限定するなら「言葉」ですね。やっぱりすごく訴えかけるものが多いです。小学校の高学年の子どもたちの好みなんで、大学生のお兄さんやお姉さんたちときっと変わらないんですよ。ちょっとお兄さんお姉さんになってみたいですね……。高学年にもなると、もう愛とか恋とかの話もわかっちゃいます。」（大谷ら,2007,p.60）と述べている。

化への志向やその全領域への意識を欠落したかたちで受容されてきた傾向にある」(桑原,2003,p.39)との指摘も踏まえると、J-POP だけに留まらない理解を促し、言語文化へと拓かれる道筋をつくり上げる必要がある。

それと関連して三つには、具体的な学習活動の姿として、学習者が歌詞を持ち込み、それを学習材として扱うことのできるような学習であることが求められる。これは、音楽科教育の場で水戸が述べていた「“所有権”は若者たちにある」という文言と関連している。国語科教育の実践においても、特定の歌詞を教室全体で統一して教材としているものが多く見られる。ただ、これでは学習者個人個人の嗜好の違いをうまく活かした活動とは言いがたい。

ところで難波博孝(2008)は、現在の国語科の内容を「解体／再構築」することにより六つの科目を設定することにより、個々の授業の目標、内容を明確にしようとする論を打ち出したものであるが、この中で科目の一つである「思想科」について以下のように言及している。

文学教材を「思想科」で使うためには、まずは、自分が心ひかれる作品を持ち込んでこなくてはならない。なぜなら、「思想科」において重要なのは、まずは「自分の思想」つまり、「自分の中の囚われ」を見つめることであり、そのためには、最初は自分が心ひかれる作品を持ち込み、自分がどのように心ひかれるのか、心ひかれるわけには自分の「心の構え」の中にどのようなものがあるのかを探らなければならないからである。(難波,2008,pp.280-281)

この視点は十分な示唆を与える論と言える。自らが「心ひかれる作品」を国語科学習の場に持ち込むことの具体的な意義を論じたものと捉えられるからである。このような学習材となる作品を、学習者自らが持ち込むということはリテラチャー・サークルなど読書教育の文脈でも提案されることがある。J-POP は、学習者にとって身近であるという点でこれらの活動のための足場として機能しうると考えられる。

以上のようなことが国語科教育において J-POP を扱うことの意義や条件として挙げられる。

## 6. 結語

稿者は、友人とともに「いいな」と思ったことばを貯めるとともに、それが貯まった頃にそれを共有するという営みを行っている。それは自らの言語生活に対して意識的になるという効果と共に、再びことばを共有することを励みとし、さらに他のことばを探そうとする効果を感じている。

このような言語生活を営むことは、どのようなことにつながるだろうか。たとえば平成 16 年の文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」では、「教養・価値観・感性等」の領域が設けられている。これは、「主として国語力によって形成され、かつ、「考える力、感じる力、想像する力、表す力」の基盤の役割をも果たしているのである。」(文化審議会答申,2004,p.8)と説明されている。この文言からは、国語科教育が価値観などへのアプローチも志向しなければならないということが示唆される。学習者が自らの意志で、出逢ったことばを「いいな」と思う経験を積み重ね、かつそれを自覚することは「教養・価値観・感性等」の領域へのアプローチとなるだろう。J-POP はその階梯の足場となると考えられる。

## 7. 参考引用文献

安部有希・伊東英(2008)「音楽教科書におけるポピュラー音楽—教材としての意義と可能性—」

- 岐阜大学総合情報メディアセンター『岐阜大学カリキュラム開発研究』Vol. 25, no. 2,pp.56-64
- 石津正賢（1995）「自らの読書生活と言語生活を豊かなものに—主題単元「時間は、伸び縮みする！」の場合—」日本国語教育学会『月刊国語教育研究』283集,pp.28-31
- 石津正賢（1996）「自らの読書生活と言語生活を豊かなものに—三年間の継続した学習指導を通して—」山口国語教育学会『山口国語教育研究』第6号,pp.22-31
- 井手口彰典（2007）「聖典としての J-POP と音楽科教育」日本音楽教育学会『音楽教育実践ジャーナル』vol.5 no.1,pp.103-115
- 鳥賀陽弘道（2005）『J ポップとは何か—巨大化する音楽産業』岩波新書
- 大谷義昭・大槻葉子・笹原啓太・相澤義彦・千葉沙織里・宮腰瑛子・佐々木麻希子・鈴木皓子・水戸博道（2007）「J-POP と学校教育」日本音楽教育学会『音楽教育実践ジャーナル』vol.5 no.1,pp.58-65
- 尾崎祐司（2013）「高等学校の音楽学習における J-POP での「教育内容」について—教科書掲載曲の歌詞に描かれる「憧憬」—上越教育大学『上越教育大学研究紀要』第32巻,pp.363-373
- 尾崎祐司・小森保弘・荒木哲弥・西園友美・長谷川遥・平山亜佑美（2012）「高等学校の音楽学集における「音や音楽と生活や社会とのかかわり」—ポピュラー音楽教材の導入実態調査からの考察—上越教育大学『上越教育大学研究紀要』第31巻,pp.339-349
- 木下和彦（2014）「中学・高校音楽かにおける J-POP を用いた実践の展開—雑誌『教育雑誌』中学・高校版 1989-2013 年の記事分析を通して—」東京学芸大学大学院連合学校教育研究科『学校教育学研究論集』第30号,pp.101-114
- 倉澤栄吉（1992）「歌詞の時代へ—地域単元に向けて—」日本国語教育学会『月刊国語教育研究』246集,pp.56-63
- 桑原隆（1996）『言語生活者を育てる—言語生活論&ホール・ランゲージの地平—』東洋館出版社
- 桑原隆（1998）『言語活動主義・言語生活主義の探究—西尾実国語教育論の展開と発展—』東洋館出版社
- 桑原隆（2003）「言語生活—機能・コンテクスト・教材化研究」日本国語教育学会『月刊国語教育研究』370集,pp.38-41
- 佐久間義夫（2013）「目的意識・感動・振り返りの学習サイクルを」明治図書『実践国語研究』37巻3号,pp.63-65
- 竜田徹・鈴木愛理（2012）「抜き書きノートという試み—国語教育の方法に関する一提案—」全国大学国語教育学会『全国大学国語教育学会発表要旨集』第122集,pp.129-132
- 竜田徹（2014）『構想力を育む国語教育』溪水社
- 田近洵一（1999）『増補版 戦後国語教育問題史』大修館書店
- 丹藤博文（2010）「詩歌の学習指導の方法」全国大学国語教育学会『新たな時代を拓く 中学校・高等学校国語科教育研究』学芸図書,pp.173-177
- 友岡晃嗣（2006）「高等学校における詩教育について～歌詞の可能性～」愛媛国語国文学会・愛媛県高等学校教育研究会国語部会『愛媛国文研究』第56号,pp.17-25
- 難波博孝（2008）『母語教育という思想—国語科解体／再構築に向けて—』世界思想社
- 西尾実（1975a）『西尾実国語教育全集 第四巻』教育出版
- 西尾実（1975b）『西尾実国語教育全集 第七巻』教育出版
- 浜本純逸（1992）「単元学習と教材」日本国語教育学会『ことばの学び手を育てる 国語単元学習の新展開 I 理論編』東洋館出版社,pp.70-86

- 文化審議会答申（2004）「これからの時代に求められる国語力について」
- 堀江佐和子（2009）「教科書の名言と出会う—ゆたかな言葉と出会い、自分自身をみつめる—」日本国語教育学会『月刊国語教育研究』449集,pp.16-21
- 榎井英人（2006）『「国語力」観の変遷—戦後国語教育を通して—』溪水社
- 町田守弘（1992）「単元「身近なことばを集める」—「ワードハンティング」の実践—」日本国語教育学会『ことばの学び手を育てる 国語単元学習の新展開VI高等学校編』東洋館出版社,pp.232-245
- 町田守弘（1993）「詩歌と音楽の接点を探る」東京法令出版『月刊国語教育』13巻10号,pp.88-91
- 町田守弘（2004）「歌詞を用いた授業の可能性を探る—日本のうたの教材化を求めて—」明治図書『教育科学国語教育』46巻5号,pp.102-106
- 町田守弘（2005）「国語科におけるサブカルチャー教材の可能性を探る—高等学校現場へのアンケート調査に即して—」早稲田大学教育学部『学術研究（国語・国文学編）』第53号,pp.1-14
- 町田守弘（2009）『国語科の教材・授業開発論—魅力ある言語活動のイノベーション—』東洋館出版社
- 町田守弘（2014）「国語単元学習の魅力を探る—高等学校における言語単元の構想を通して—」日本国語教育学会第77回国語教育全国大会シンポジウム提案資料
- 水戸博道（2007）「現代の若者と J-POP」日本音楽教育学会『音楽教育実践ジャーナル』vol.5 no.1,pp.116-125
- 吉永幸司（2010）「国語科の低学力は言語生活力の崩壊」明治図書『現代教育科学』第647号,pp.38-41
- 吉村治広（2005）「歌詞のメッセージ性に着目したポピュラー音楽の学習方法— Mr.Children の歌を教材として—」日本学校音楽教育実践学会『学校音楽教育研究 日本学校音楽教育実践学会紀要』第9号,pp.158-169

（広島大学大学院博士課程後期2年）